神田外語大学大学院紀要　言語科学研究　第24号（2018）【研究論文】pp. 105-125

後置される副詞の語順

綿貫　啓子
（シャープ株式会社）

要旨

後置される副詞について、副詞を命題内副詞と命題外副詞に二分し、対話データ[1]を基に以下の3点を論じる。1）後置される命題外副詞と命題内副詞はともに、命題に対する話し手の評価・判断（話し手が聞き手に表出する心的態度）を表す機能を有する。2）命題内副詞と命題外副詞がともに後置される場合、その語順は通常文の場合と逆になる。3）副詞が後置されるとき、命題内副詞よりも命題外副詞の方が高い位置にある。

キーワード：後置文　命題外副詞　命題内副詞　語順
統語的位置

1．はじめに

日本語の文は述語で終わり、その後に、終助詞以外の要素が現れない原則がある（久野1973）。しかし、話し言葉ではこの原則が当てはまらず、(1)–(3)に示すように、述語の後に名詞句や後置詞句、副詞などが現れることが少なくない。

（1）387B[2]：読んじゃった　インタビューのとこ　（Data 002[3]）
前置要素　後置要素

（2）262B：え、学校までねー　早くて20分だよ　車で　（Data 002）

（3）359B：二万ぐらいだった　多分　（Data 006）

このような文は後置文、あるいは倒置文、右方転移文などと呼ばれ、その機能や構造についてHaraguchi（1973）はじめ、多くの研究者によって論じられてきている（井上1978, 久野1978, Simon 1989, Ono and Suzuki 1992, Endo

1996, 高見（1995,1998), Abe 1999, Tanaka 2001, 綿貫（2006, 2011a, b, 2012）など)。本稿では「後置文」という用語を用いるが、何らかの要素が後ろへ（右方向へ）移動する、ということを示唆するものではなく、表層上、基本語順とは異なり、述語の後ろに要素が置かれている、という意味で用いている。また、説明上、後置文の文頭から述語までを「前置要素」、述語の後ろに置かれた要素を「後置要素」と呼ぶこととする。後置要素は［　　］で囲んで示す。

筆者は綿貫（2011a, b）において、後置される副詞には、先行する命題（前置要素）の表す事態に対して話し手が評価・判断をする機能があることを示し、その構造上の位置は、先行する前置要素全体に付加される位置にあると主張した。本稿では、後置される副詞の語順を考察することで綿貫（2011a, b）を発展させる。まず第2節で副詞の種類を分類し、第3節で後置される副詞の意味機能を概観するとともに、第4節で後置されにくい副詞があることを示す。次に、第5節で、述語を修飾する副詞が二つ以上あるとき、後置される副詞には語順があり、通常文に見られるのと逆になることを示す。さらに、これらの点を踏まえ、第6節で、副詞が後置されるときの構造上の位置が2種類あることを示す。最後に第7節で全体をまとめる。なお、ここで扱う副詞は品詞としての副詞ではなく、統語的な働きが副詞的な成分すべてである。

2．副詞の分類

一口に副詞と言ってもその種類はさまざまであり、その分類について多くの研究がある（中右1980, 野田1984, 仁田2002など)。中右（1980）は、発話としての文を命題（proposition）とモダリティ（modality）の二つの意味成分に分類し、命題は話者が切り取った現実世界の状況（できごと、状態、行為、過程など）を叙述したもので、話者によって客体化された客観的世界を指示、一方、モダリティは発話時における話者の心的態度を叙述したもので、発話の時点において客体化しえない、話者の主観的世界を指示している、とした（中右 1980:159)。そして、副詞を命題の内側にあるもの（命題内副詞）と、外側にあるもの（命題外副詞・モダリティの副詞）に二分し、前者は命題の一部を形成し修飾限定するものであり、後者はモダリティを表明するものであると説明した（中右 1980:161)。

具体的には、命題外副詞は、命題をどのように修飾限定しているかで分類で

きるとし、主に次の3種類に分類した。[4]

（4）命題外副詞（中右 1980:162-163より筆者まとめ）

a. 価値判断の副詞＝ある事態、状態に対する話者の評価、価値判断（例：運悪く、あいにく、幸いにも、驚いたことに）

b. 真偽判断の副詞＝命題内容の真偽の度合いに対する話者の査定的判断（例：おそらく、多分、もちろん、きっと、確か）

c. 発話行為の副詞＝話し手または聞き手の発話の仕方に制限を加える（例：率直に言って、要するに、本当のところ）

一方、命題内副詞については、命題を形成するどの要素を修飾限定するかで分類できるとし、次の5種類に分類した。

（5）命題内副詞（中右 1980:165-166より筆者がまとめ）

a. 時・アスペクトの副詞（例：明日、すでに、もう、やがて、まもなく）

b. 場所の副詞（例：ここに、あそこで、公園で）

c. 頻度の副詞（例：いつも、常に、しばしば、まれに）

d. 強意・程度の副詞（例：すこし、完全に、きわめて）

e. 様態の副詞（例：のろのろと、すばやく、ていねいに、用心深く）

中右はさらに、「主語指向の副詞」として、価値判断の副詞（命題外副詞）の特殊な場合である「価値判断の主語副詞」（例：賢明にも、愚かにも、頑固にも）と、様態の副詞（命題内副詞）の特殊な場合である「様態の主語副詞」（例：わざと、楽しそうに）を挙げ、前者は話者の主観的態度を直接的に叙述するのに対し、後者は話者がそれを客体化して叙述する点に違いがあるとした（中右 1980:183-184）。

次に、野田（1984）の分類を見てみよう。野田は、述語を修飾する副詞を陳述の副詞、時点の副詞、時相の副詞、能動者の副詞、対象物の副詞に分類し、それぞれが属する階層が（6）の順序であるとした。

（6）述語を修飾する副詞の順序（野田1984:80-82より筆者まとめ）

副詞の種類	述語付加要素	格成分	例
陳述の副詞	ムード		発話行為：要するに、簡単に言えば 価値判断：あいにく、残念ながら 真偽判断：たぶん、おそらく 領域指定：基本的には、表向きは
時点の副詞	テンス		来年、昔、2、3日前
時相の副詞	アスペクト		相対的な早さ：もう、まだ 頻度：ときどき、毎年 期間：3ヶ月、8時から10時まで 変化の速さ：しだいに、急に
能動者の副詞[5]	ボイス	他動詞主語	意図：わざと、うっかりと 態度：楽しそうに、おそるおそる やり方：力いっぱい、大声で
対象物の副詞		他動詞目的語、自動詞主語	様態：トントンと、ぴたりと 結果：きれいに、まるまると

陳述の副詞の分類は中右（1980）の命題外副詞の分類に拠っている（野田1984:89注1）ため、時点の副詞、時相の副詞、能動者の副詞、対象物の副詞が中右（1980）の命題内副詞に相当する。（7）は、これら副詞が文中に生起する位置関係（格成分（主題「～は」、能動者の格（他動詞主語）、対象物の格（他動詞目的語、自動詞主語）、結果の格「～に」）との位置関係）を示している。たとえば、陳述の副詞［陳述］は、主題「～は」の前後に現れるのに対し、対象物の副詞［対象物］は対象物の格の後に現れる。

（7）副詞の文中での位置関係（野田1984:82-85より筆者まとめ）

陳述 時点-主題-陳述 時点 時相-能動者の格-能動者 時点 時相-対象物の格-対象物-結果の格-程度-述語

さらに、仁田（2002）の分類を見てみよう。仁田は文を概略、モダリティ、テンス、命題に分け、それぞれの階層で働く副詞をモダリティ修飾成分、時の

状況成分、命題内修飾成分とした。この分類では、モダリティ修飾成分が中右（1980）の命題外副詞に相当する。さらに、命題内で働く副詞を頻度の副詞、時間関係の副詞、程度量の副詞、様態の副詞、結果の副詞に分類し、それぞれが文において作用する階層と機能を次のように記述した。

（8）[[[[[格－動詞]ボイス]アスペクト]肯否]テンス]モダリティ）

命題（事態）　（仁田 2002:33一部改変）

（9）副詞の種類と階層（仁田 2002:9-41より筆者まとめ）

副詞の分類	作用する階層	例
モダリティ修飾成分	モダリティ：話し手の評価や認識	面白いことに、おそらく、どうぞ
時の状況成分	テンス	あの頃
頻度の副詞	アスペクト：事態生起の回数的あり方を特徴づける	しばしば
時間関係の副詞	アスペクト：時間の中での事態の展開のありよう	しばらく、急に
程度量の副詞	動詞：事態に存在する程度性を限定	とても、ちょっと、ひどく
様態の副詞	動詞：動きの展開過程を特徴づける「動き様態」の副詞と、主体の心的状態を特徴づける「主体状態」の副詞[6]	動き様態：ビリッと（破れた）、ゆっくり（下る） 主体状態：わざと（掴まった）、喜んで（言った）
結果の副詞	動詞：動きが実現した結果の、主体や対象の状態	ボロボロに（破れた）、赤く（染めた）

上記分類を踏まえ、本稿では、中右（1980）に準じて副詞を命題外副詞と命題内副詞の２種類に分類し、後置される副詞の語順を分析する。その前に次節でそれぞれの意味機能を見ていく。

３．後置される副詞の意味機能

綿貫（2011a,b）では、後置される命題外副詞と命題内副詞の意味機能を対話データに基づいて分析している。まず、典型的な命題外副詞である「多分」、「きっと」、「確か」が後置要素として現れる対話データを見てみると、いずれの例でも、命題外副詞が本来持っている話し手の心的態度が文末に現れている。

（10）359B:二万ぐらいだった 多分 （Data 006）

（11）290A:元気じゃなーい↗ きっとー （Data 018）

（12）111A:じゅんの友達なんだよ 確か （Data 033）

命題外副詞「きっと」は、通常文（13a）では、命題に対する「話し手の確信・判断」の解釈と、一定の条件の下に繰り返して起こることがらの「習慣・確率が高い」、という解釈の２つが可能である。しかし、（13b）のように「きっと」が後置要素として現れると、命題に対する「話し手の確信・判断」の解釈のみ可能になる。

（13）a. 何か嘘をつくと　その夜はきっと夜半に目が覚める
（工藤 2000:210（一部改変））
b. 何か嘘をつくと　その夜は夜半に目が覚めるよ きっと

さらに、（13）を過去形にして、「習慣・確率が高い」の解釈のみが出る状況にすると、「きっと」が後置できない。

（14）a. 何か嘘をつくと　その夜は　きっと夜半に目が覚めたものだ
b. *何か嘘をつくと　その夜は　夜半に目が覚めたものだ きっと

この事実から、命題外副詞は後置位置において、話し手の命題に対する確信・判断、すなわち心的態度の意味機能を有することが示唆される。

次に、後置される命題内副詞の意味機能を見てみる。命題内副詞は、命題の一部を形成し修飾限定するものである（中右 1980:161）。対話データでは、時間的特性を表す「ずっと」「やっと」、事態の時間的成立状況を限定する「去年」「最近」、程度量の「ちょっと」「あんまり」などが後置要素として観察されるが、興味深いことに、これら後置される命題内副詞は、命題外副詞と同じよう

に、命題に対する話し手の評価・判断（心的態度）を表す傾向がある。たとえば、下記（15a）で後置されている「ずっと」は、通常の語順（15b）と比べると、省略されている文主語「あなた」の視点での評価・判断の解釈よりも、「話し手」の視点での聞き手に対する「ずっと」に込める不満な感情が強く出てくる。

（15）a. 88A:携帯はさー　持つ気ないの↗　ずっと　（Data 004）
　　b. 携帯はさー　ずっと　持つ気ないの↗

下記（16）では、通常文では文頭に現れることが多い、事態の時間的成立状況を限定する副詞「最近」が後置要素として現れている。通常の語順「さいきーん　あたしさ　テレビばっかり見てるじゃん」と比べると、後置位置に現れることで、「テレビばかり見てる」事態が「最近」であると話し手が認識・強調する解釈がより強く出てくる。

（16）225A:あたしさ　テレビばっかり見てるじゃん　さいきーん　だから話題がさ　芸能なんか　そんネタばっかなんだよね　（Data 020）

このように、後置される命題内副詞と命題外副詞には、命題に対する話し手の心的態度を表す傾向がある。

4．後置されにくい副詞

前節で、後置される命題外副詞と命題内副詞はともに、命題に対する話し手の心的態度を表す機能があることを見た。このことは、後置されると、命題内副詞が本来持っている“命題の一部を形成し修飾限定する”機能が働きにくいことを示唆している。実際、分析に用いた対話データ（23対話、計230分）では、命題内副詞に分類される様態の副詞は下記の２例（ガンガン、ちゃんと）だけで、同じ命題内副詞である時間的特性（ずっと、やっと、もう、今まで、久しぶりに、等）や頻度特性（いつも、一回、よく、滅多に、また、いつも、等）、程度や量（ちょっと、あまり、相当、結構、なかなか、ずいぶん、等）の副詞と比べて少なかった。

（17）言われた↗　ガンガン　（Data 023）

（18）見てたの　わたし　ちゃーんと　（Data 006）

様態の副詞自体は「ゆっくり」、「すばやく」、「用心深く」等、数多く存在し、後置文を作例することも可能であるが、実際の対話で後置要素としてあまり現れないのは何故だろうか。次の例に見るように、様態の副詞が後置されると非文になる場合もある。

（19）a.（危険だから）この階段はゆっくり上ってください
　　b. *（危険だから）この階段は上ってください　ゆっくり

（20）a.（赤ちゃんが寝てるから）ドアはそっと開けてね
　　b. *（赤ちゃんが寝てるから）ドアは開けてね　そっと[7]

仁田（2002）は、様態の副詞は、事態（命題）の内側から、事態の実現・成立のあり方を特徴づけるものであり、一方、「いつも」や「よく」といった頻度特性の副詞は、事態の外側から、事態の成立のあり方や成立状況を特徴づけるものとしている（仁田2002:77）。綿貫（2011a,b）では、副詞の後置について、前置要素で発した自己発話をリアルタイムにモニタリングし、その叙述内容（命題）に対して話し手が認識・評価をする機能が働いているという仮説を示した。後置される様態の副詞が少ないのは、様態の副詞の本来の機能、すなわち、事態の内側から事態の実現・成立のあり方を特徴づけるという機能が、後置文の情報処理プロセスとミスマッチしていることが一因と言えよう。

5．後置される副詞の順序

野田（1984）は、一つの述語を修飾する副詞が二つ以上ある場合、副詞どうしの順序が概略、［陳述の副詞－時点の副詞－時相の副詞－能動者の副詞－対象物の副詞－述語］であり、この順序に反すると非文になることを示した（野田1984:80（2））。第2節で見たように、野田の陳述の副詞は命題外副詞、それ以外の副詞は命題内副詞に分類できるので、通常文の場合の副詞の順序は［命題外副詞－命題内副詞］となる。

（21）a.　たぶん　思わず声を出したのであろう　（命題外－命題内）
　　b. *思わず　たぶん声を出したのであろう　（命題内－命題外）
（野田1984:80（3）　括弧内は筆者）

面白いことに、これら副詞が後置要素として現れると次のような現象が観察される。

（22）a. 思わず声を出したのであろう　たぶん　（命題内－命題外）
　　b. *たぶん声を出したのであろう　思わず　（命題外－命題内）

すなわち、命題外副詞を前置要素に残したまま命題内副詞が後置要素になると非文になる。他の例も見てみよう。

（23）a. あいにく　台風がだんだん近づいているようだ　（命題外－命題内）
　　b. *だんだん　あいにく台風が近づいているようだ　（命題内－命題外）

（24）a. だんだん台風が近づいているようだ　あいにく　（命題内－命題外）
　　b. *あいにく台風が近づいているようだ　だんだん　（命題外－命題内）

さらに、二つの副詞とも後置要素になると、副詞どうしの順序は、先に示した通常文の副詞の順序と逆で、［命題内副詞－命題外副詞］になる。

（25）a. 声を出したのであろう　思わず　たぶん　（命題内－命題外）
　　b. *声を出したのであろう　たぶん　思わず[8]　（命題外－命題内）

（26）a. 台風が近づいているようだ　だんだん　あいにく　（命題内－命題外）
　　b. *台風が近づいているようだ　あいにく　だんだん　（命題外－命題内）

野田は通常文における副詞の順序に働いている原則として、「主観的なものから客観的なものへ」、「述語との結びつきが弱いものから強いものへ」（野田1984:80）を挙げているが、後置される副詞の順序については、「客観的なものから主観的なものへ」、「述語との結びつきが強いものから弱いものへ」という原則が働いていると言える。

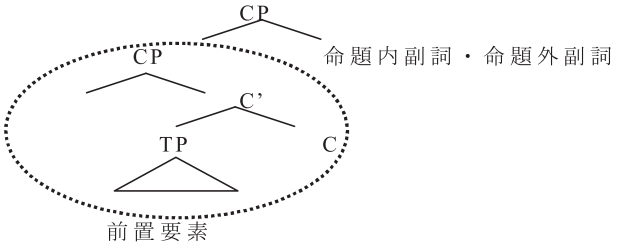
6．後置される副詞の統語的位置

本節では、命題外・命題内副詞が後置要素として現れるときの意味機能や順序に関するこれまでの観察をもとに、構造上の位置を考察する。

6.1　綿貫（2011a,b）の提案

後置される副詞について、綿貫（2011a,b）では、(27）のように、命題内副詞・命題外副詞の区別なく、先行する命題全体（前置要素）に付加される構造を提案した。[9]

(27）後置される副詞の構造上の位置（綿貫2011a,b）



下記（28b）と（28c）では、副詞「絶対」の修飾する作用域が異なる。(28b）では、「絶対」は「知らない」を修飾する解釈と、「信じていた」を修飾する解釈の両方が可能である。一方、(28c）では、「知らない」を修飾する解釈よりも、「信じていた」を修飾する解釈の方が優位になる。

(28）a.　花子は　[太郎が絶対事件のことを知らないと]　信じていたんだ
　　b.　絶対　花子は[太郎が事件のことを知らないと]　信じていたんだ
　　c.　花子は　[太郎が事件のことを知らないと]　信じていたんだ　絶対

また、通常の否定文（29a）において「きつく」は否定の意味に含まれるが、後置文（29b）では、「きつく」は否定の意味に含まれる解釈が難しくなり、非文になる。

(29）a.　（後でほどくから）紐はきつく縛らないで下さい
　　b. *（後でほどくから）紐は縛らないで下さい　きつく

付加構造（27）を提案したのは、副詞が後置されるとき、(28c）(29b）に見られるように、移動操作が関わっていないことが示唆されたためである。

一方、第5節で、命題内副詞と命題外副詞がいずれも後置されるとき、副詞どうしに厳格な順序があり、［命題内副詞－命題外副詞］であることを見た。

この事実を構造（27）ではうまく説明できない。

（30）a. 声を出したのであろう　思わず　たぶん（=（25a））
　　b. *声を出したのであろう　たぶん　思わず（=（25b））

前置される副詞の順序が［命題外副詞－命題内副詞］であり、後置される副詞の順序が［命題内副詞－命題外副詞］であることから、述語を挟んだ語順は（31）のようになる。

（31）命題外副詞－ 命題内副詞　述語　命題内副詞 －命題外副詞

Baker（1985）の鏡像原理（mirror principle）によれば、述語から遠い命題外副詞は、述語から近い命題内副詞よりも階層的に高い位置に属することになる。さらに、（22b）で、命題外副詞を前置要素に残したまま命題内副詞が後置要素になると非文になることを見たが、これは、命題内副詞がより高い位置にある命題外副詞を飛び越えてRelativized Minimality（RM、相対的最小性）に違反したためと説明できる。[10]

そこで、（27）の後置される副詞の位置が階層化されていると仮定し、その機能範疇が具体的にどのようなものであるか、前置要素の終助詞等が位置する機能範疇との関係がどうなのかを次に見ていく。

6.2　後置される副詞の機能範疇

南（1974）は、日本語の文の構造に対して4つの階層を設定した。（32）は南の説を田窪（1987）が単純化したものである。

（32）文の階層と統語範疇、意味タイプ（田窪 1987:38より筆者まとめ）
　A（動詞句　動作）＝様態・頻度の副詞＋補語＋述語
　B（節　事態）＝制限的修飾句＋主格＋A＋（否定）＋時制
　C（主節　判断）＝非制限的修飾句＋主題＋B＋モーダル
　D（発話　伝達）＝呼掛け＋C＋終助詞

D類について南は、「この段階では相手に対する関係がもっぱら問題」で、「相手に対する、言語主体のなんらかの働きかけ」としている（南 1974:174）。

井上（1976）は生成文法の枠組みで（33）に示す統語構造を仮定し、a+c

または a+b+c に対する話し手の心的態度を表すモダリティ（d）[11]と、話し手の聞き手に対する働きかけを表すモダリティ（e）とを設定している（井上1976:5-29）。

（33）太郎が序文を翻訳し　てい　る　だろう　ね。
a　b　c　d　e
文の核　相　時制　認識モーダル　発話伝達のモーダル
井上（1976:5(1), 2006:16(15)）

このように、先行研究において、「文」の成立要件として、発話の叙述内容（事態＝時制＋命題）の外側に、叙述内容に対する話し手の発話時における認識・態度を表すモダリティと、話し手の聞き手への情報伝達・態度を表すモダリティとがあることが論じられてきた。

生成文法では、文の統語構造を記述するにあたり、時制を含んだ命題句TPの外側に、人間が与えるこのような意味とのインタフェースとしてCPという機能範疇を置いているが、近年、CP領域を精緻化して、文の「語用的機能」「情報構造との橋渡し」との関連で統語構造・統語論を発展させる方向性がRizzi（1997）、長谷川（2007、2010）、遠藤（2009）などで打ち出され、CP領域に談話情報に関わるさまざまな機能範疇を持たせることが提案されている。Rizzi（1997）は、CP領域が談話情報にかかわる機能範疇から成る（34）のような階層構造を持つことを提案した。

（34）ForceP　TopP*　FocP　TopP*　FinP　　（Rizzi 1997:297（41））[12]

一番高い階層にあるForceP（illocutionary force）は、肯定文や疑問文、命令文などの文のタイプや発話の力を意味し、最下層のFin（ite）Pは、文の定形・非定形を表す要素が生じる階層である。ForcePとFinPの間にあるTop（ic）PやFoc（us）Pは、トピックスやフォーカスといった談話情報に関わる要素が生じたときに限り活性化される。

Cinque（1999）は、この階層構造を副詞や助動詞について提案し、モダリティ表現に関わる機能範疇の階層構造を設定することにより、franklyやprobablyといった副詞が特定の順序で文中に現れることを説明した。この階層に、話し手が関わる機能範疇と聞き手が関わる機能範疇が表現されているとの

議論がある（遠藤2009:109）。遠藤（2009）は、Cinque（1999）の階層と日本語との接点を探るべく、日本語の文の統語構造を（35）のように設定した。

（35）a. 並べ　られ　てい　なかっ　た　そう　です　よ
b. 述語　ボイス　アスペクト　否定　テンス　対事的ムード　丁寧　対人的ムード
（遠藤 2009:103（15）一部改変）

上記（35b）において、遠藤（2009）は対事的ムードを話し手が関わるムード、対人的ムードを聞き手が関わるムードとし、聞き手が関わる機能範疇の方が話し手が関わる機能範疇よりも高い階層に属すると論じ、このことは、前述した南（1974）のC類とD類の分化に相当すると述べている。

（27）において、後置される副詞は前置要素の機能範疇CPよりも高い位置にある。さらに、命題外副詞は命題内副詞よりも統語的に高い位置にある。このことは、後置される命題外・命題内副詞がいずれも、南（1974）のD類、井上（1976）の話し手の聞き手に対する働きかけを表すモダリティ（e）、遠藤（2009）の聞き手が関わる対人的ムードに属する、すなわち、この階層が分化する可能性があることを示唆している。[13]

また、遠藤（2010）は、日本語の終助詞に（36）のような線形的な順序が存在することについて、Cinque（1999）のモダリティ表現の階層構造を援用して説明している。「来たわよ」とは言えるが、「*来たよわ」とは言えないのは、これら終助詞の順序がCinque（1999）の階層により決定されているからだとし、終助詞「ね」は聞き手からの同意を得る発話行為（Speech-Act）のムードの階層で認可されるとした。

（36）来た　わ　な　よ　ね
述語　認識のムード　証拠性のムード　評価のムード　発話行為のムード
（遠藤2010:82（31）一部改変）

（36）の発話行為のムードの階層は、話し手が聞き手に対して確認をするという機能を持つという点で、（35）の対人的ムードの階層に相当する。そして、後置される命題内・命題外副詞は、終助詞「ね」と（37）の語順でのみ共起する。

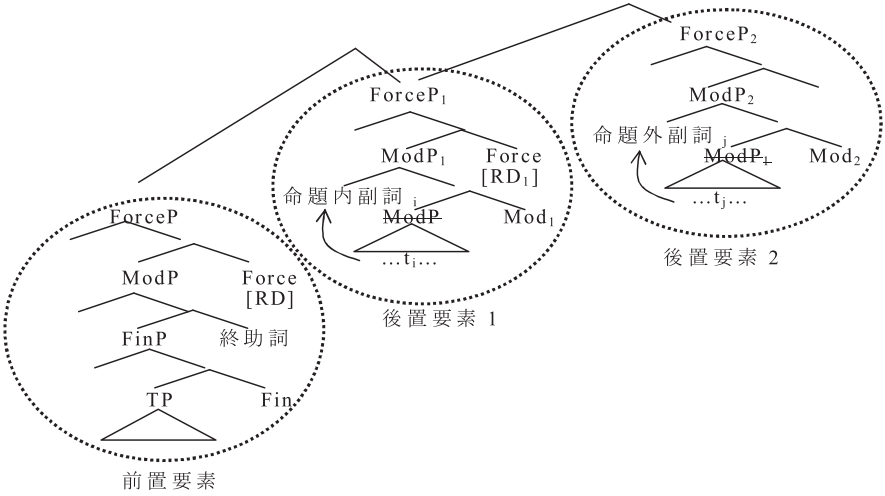
（37）台風が近づいているようだ ね　　だんだん　　あいにく
　　終助詞　命題内副詞　命題外副詞

これらの事実から、本稿では、談話情報と関わる要素を精緻化しCP領域に想定するRizzi（1997）の階層構造とCinque（1999）のモダリティ階層を援用し、副詞が後置されるとき、前置要素内の終助詞が位置する階層（南（1974）のD類、井上（1976）の話し手の聞き手に対する働きかけを表すモダリティ（e）、遠藤（2009）の聞き手が関わる対人的ムードの階層に相当。ModPとする。）がModP1、ModP2に分化し、それぞれ命題内副詞、命題外副詞が位置する機能範疇と仮定する。[14,15]

6.3　構造の考察

これまでの議論を踏まえ、副詞が後置されるときの構造は、名詞句などの項要素が後置される場合の構造として綿貫（2011a）が提示したのと同様、複数の節（clause）から成り立ち、後置要素は節の一部（断片）であって、かつ、前置要素と関係のある要素であると想定し、構造（38）を提案する。後置要素に相当する節に移動と削除が関与する。

（38）後置される命題内・命題外副詞の構造上の位置[16]



構造（38）において、Forceは発話の力を示す機能範疇であり、主文であれば、発話行為機能を明示する。後置文はForceの一つのタイプであり、ForcePの主要部に、後置という発話行為を駆動する素性［RD（Right Dislocation）］を持つと仮定する。ForceP（前置要素）内の素性［RD］が活性化すると、連動して新たな$ForceP_1$（後置要素1）が生成され、命題内副詞が$ModP_1$の指定部に移動し、補部であるModPが前置要素のModPとの構造的・意味的平行性を満たすことから削除される。さらに$Force_1P$内の素性［RD_1］が活性化すると、$ForceP_2$（後置要素2）が生成され、命題外副詞が$ModP_2$の指定部に移動し、補部$ModP_1$が削除される。命題内副詞と命題外副詞はそれぞれ$ModP_1$、$ModP_2$の指定部で、主要部のモダリティにより認可され、先行する命題（前置要素）の表す事態に対して話し手が評価・判断する（聞き手に伝えるために表出する）モダリティ機能を持つようになる。

第5節の（22b）で、命題外副詞が前置要素に、命題内副詞が後置要素に存在すると非文になることを見たが、構造（38）を仮定すれば、命題内副詞が命題外副詞よりも高い位置にあるため、RMの違反が生じ非文になると説明できる。

（39）a. 思わず声を出したのであろう　たぶん　（=（22a））
　　b. *たぶん声を出したのであろう　思わず　（=（22b））

前置要素に「たぶん」が現れなければ「思わず」を後置できるのは、RM違反が生じないためであると分析できる。

（40）声を出したのであろう　思わず

さて、中右（1980）は、副詞を命題外副詞と命題内副詞に二分するさまざまな論拠を論じているが、ここでは本節の議論に関係する一部を紹介しながら、提案した構造（38）の妥当性を検証する。

まず第一に、一般にモダリティの作用域は命題内容の全体に及ぶが、命題外副詞も命題内容の全体を修飾する（中右 1980:173）。

（41）a. 運よく　彼はもう行ってしまった　（中右 1980:173（12）一部改変）
　　b. 運悪く　彼は鍵を忘れた　（中右 1980:174（13）一部改変）

これらの命題外副詞が後置されると、通常文と同様、先行する命題内容の全体を修飾する解釈になり、構造（38）はこれをうまく説明できる。

（42）a. 彼はもう行ってしまったよ 運よく
　　b. 彼は鍵を忘れたんだ 運悪く

第二に、命題外副詞は、命題内否定の作用域に生ずることはできない。一方、命題内副詞は、命題内否定の焦点になることができる（中右 1980:187-188）。

（43）a. 賢明にも彼らはだれひとりその賞を受けなかった
（中右1980:187（8））
　　b. 彼らは客人を丁重にもてなさなかった[17]
（中右1980: 188（9））一部改変）

命題外副詞「賢明にも」が後置要素として現れると、（43a）と同じく、命題内否定の作用域外の解釈になる。一方、命題内副詞「丁重に」が後置要素として現れると非文となり、（43b）と同じ解釈ができない。このことから、後置される副詞は命題内否定の作用域外にあることが示唆されるが、この事実は、TPの外側に移動した要素は、元位置（命題内）に戻れない（再構築されない）と仮定することで導かれる。[18]

（44）a. 彼らはだれひとり　その賞を受けなかったんだ 賢明にも
　　b. *彼らは客人をもてなさなかったんだ 丁重に

以上、綿貫（2001a,b）を発展させ、副詞が後置されるときの構造上の位置について、Rizzi（1997）の階層構造とCinqueのモダリティ構造を援用し、CP領域内のForcePとFinPの間に位置する終助詞の階層ModP（聞き手が関わるムードの階層）が分化し、階層化されると提案した。

7．まとめ

話し言葉に現れる、述語の後に副詞が後置される構文を取り上げ、対話データをもとにその意味機能と統語構造を議論した。具体的には、副詞を命題外副詞と命題内副詞に分類し、後置される命題外副詞と命題内副詞がともに、命

題に対する話し手の評価・判断（話し手が聞き手に表出する心的態度）を表す機能を有することを見た。そして、その機能がある故に、命題内副詞に分類される様態の副詞が後置されにくいことを示した。さらに、述語を修飾する副詞が二つ以上あるとき、後置される副詞には順序があり、それは、通常文の副詞の語順とは逆で、［命題内副詞－命題外副詞］であることを示した。これら意味機能、語順の観察を踏まえ、命題内・命題外副詞が後置されるときの構造上の位置を考察する上で、談話情報と関わる要素を精緻化しCP領域に想定するRizzi（1997）の階層構造とCinque（1999）のモダリティ階層の枠組みを援用し、命題内副詞よりも命題外副詞の方が高い位置にある構造を提案した。

謝辞

本稿の構想段階において、故井上和子名誉教授主宰で開催されていた研究会（通称「井上ゼミ」）で、井上先生並びに参加者各位に有益なご討論ご助言を戴きました。心よりお礼申し上げます。また、査読者の長谷川信子氏、遠藤喜雄氏に有益なコメントを戴きました。ここに謹んで感謝申し上げます。

注

1．「RWCP研究用マルチモーダル対話データベース（MMDB）」を言語資料として利用できるよう、筆者が200ミリ秒（１秒=1,000ミリ秒）のポーズ単位で区切り、話者同士のやり取りが時系列で一覧できるよう編集して、言語資料として利用可能に整備したもの。二人の自由対話（日本語を母国語とする東京近郊に住む20代の男女、友人同士、一部、初対面の対話あり）23組分。各組10分または5分の対面対話（計220分）。詳細データは綿貫（2011a）を参照されたい。

2．対話データの発話番号、話し手を示す。ここでは発話番号が387、話し手がBである。

3．対話データ番号を示す。

4．第4の種類として領域指定の副詞（例：建前としては、表向きは、基本的には）が挙げられているが、この副詞の中には命題内容の一部を成すとみられる場合がある、としているため、本稿では省いた。

5．中右（1980）の「主語指向の副詞」に相当する。

6．中右（1980）の「主語指向の副詞」に相当する。

7．この例文は、査読者の長谷川信子氏から提示されたものである。

8．（25b）は、「たぶん」にフォーカスを当て、二つの副詞の間にポーズ（間）を入れずに一つの塊のように発話すると許容されるようになるが、「たぶん」が先行する命題全体を修飾する解釈よりも、「思わず」を修飾する解釈が強くなり、通常文（21a）とは異なる解釈になってしまう。（26b）についても同様で、韻律を変えて発話すると許容されるようになるが、通常文（23a）とは異なる解釈になる。

9．綿貫（2011a,2012）では、項要素が後置される場合について、話し手の発話意図の観点を取り入れた情報構造をもとに分析し、文脈から解釈可能なもの（context-construable = CC）と解釈不可能なもの（not context-construable = not-CC）の2種類に分類でき、CCの場合は主題（topic）や対照焦点（contrastive focus）として機能し、TPの外側CP内に位置するのに対し、not-CCの場合は提示的焦点（presentational focus）として機能し、TP内に位置すると論じている。

10．査読者の遠藤喜雄氏から示唆をいただいた。Rizzi（2004）は、副詞は文頭に現れうるが、unfortunatelyのような高い位置の副詞とそれより低い位置のprobablyのような副詞が同時に現れるとき、低い位置の副詞は高い位置の副詞を飛び越えることができないと観察し、これはRelativized Minimalityに違反するためであるとしている。

(i) *Waaschijnlijk is hij helaas _____ ziek
Probably is he unfortunately sick（Rizzi 2004:234（32））

11．井上（1976）では、法助辞（modals）と呼んでいる。

12．（*）印は複数個現れる可能性があることを示す。IPはInflectional Phrase（=TP）であり、CPとの接点領域である。

13．聞き手が関わる対人的ムードの階層が２つに分化する可能性があることは、査読者の遠藤喜雄氏から指摘して頂いた。Haegemen and Hill（2014）は、オランダ語の方言である西フレマン語（West Flemish）で使われるvocatives（呼びかけ語）が一定の語順で現れることから、呼びかけ語が位置するSpeech Act（発話行為）の階層が分化すると論じている。

14．Cinque（1999）の、副詞の語順に基づくモダリティ表現の階層化はIP領域にあるが、本稿では、frankly、probably等の命題外副詞はCP領域にあると捉えている。

(i) [frankly Moodspeech act [fortunately Moodevaluative
[allegedly Moodevidential [probably Moodepistemic […
（Cinque 1999:106（92）一部省略）

15．第3節で、後置される命題内副詞と命題外副詞には、いずれも命題に対する話し手の心

的態度を表す機能がある、と分析した。しかし、この機能は、話し手が聞き手に伝えるために表出する、とも言えよう。話し手と聞き手の機能の明確な分化は今後の課題である。

16. 終助詞「ね」が発話行為のムードの階層で認可され、その発話行為のムードが分化すると仮定すると、後置される命題内・命題外副詞は終助詞のように、Mod1、Mod2の主要部を占めると分析できる可能性もある。

(i)［ForceP［ModP2［ModP1［ModP［FinP［TP　］］終助詞］命題内副詞］命題外副詞］］

Ono and Suzuki（1992）は、副詞や人称代名詞、接続詞、「～ちゃん」などの呼称がポーズなしで後置される場合について、命題に対する話し手の態度が提示・強調されるとし、その生起する位置は、話し手の情緒的（affective）・認知的態度（epistemological attitude）を表す終助詞が現れる位置と同じと考えられると述べている（Ono and Suzuki 1992:438）。

17. 「丁重に」を文頭に移動しても、否定辞のスコープ内に入る解釈が可能である。

(i) 丁重に彼らは客人をもてなさなかった

18. 注9で述べたように、綿貫（2011a,2012）では後置される項要素を2種類に分類し、文脈から解釈可能な＜CC＞の場合はTPの外側CP内に位置すると想定し、後置要素としてTPの外側CPに移動した要素は元位置（命題内）に戻れない（再構築されない）と分析している（綿貫2011a:137）。すなわち、＜CC＞の場合の項も副詞（付加詞）も、後置されたときの統語的位置はCP領域内となり、統一的に説明できる可能性が出てくる。更なる検討が必要である。

参考文献

Abe, J.（1999）On Directionality of Movement: A Case of Japanese Right Dislocation, ms., Nagoya University.

Baker, M.（1985）The Mirror Principle and Morphosymtactic Explanation. *Linguistic Inqury* 16, 373-415.

Cinque, G.（1999）*Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective.* Oxford: Oxford University Press.

Endo, Y.（1996）Right dislocation, In M. Koizumi, M. Oishi and U. Sauerland（eds.）, *Formal approaches to Japanese linguistics* 2, 1-20. MIT Working Papers in Linguistics 29. MIT.

遠藤喜雄（2009）「話し手と聞き手のカートグラフィ」『言語研究』136, 93-119. 日本言語

学会.

遠藤喜雄（2010）「終助詞のカートグラフィ」長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』67-94. 東京：開拓社.

Haegeman, L. and V. Hill（2014）Vocatives and Speech Act Projections: A Case Study in West Flemish. In A. Cardinaletti, G. Cinque and Y. Endo（eds）, *On Peripheries: Exploring Clause Initial and Clause Final Positions.* Hituzi Linguistics in English No.23. 209-236. Tokyo: Hituzi Shobo Pub.

Haraguchi, S.（1973）Remarks on dislocation in Japanese. ms., MIT.

長谷川信子（2007）「日本語の主文現象から見た統語論－文の語用機能との接点を探る」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』1-21. 東京：ひつじ書房.

長谷川信子（2010）「文の機能と統語構造:日本語統語研究からの貢献」長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』1-30. 東京：開拓社.

井上和子（1976）『変形文法と日本語：上・統語構造を中心に』東京：大修館書店.

井上和子（1978）『日本語の文法規則』東京：大修館書店.

井上和子（2006）「日本語の条件節と主文のモーダリティ」*Scientific Approaches to Language,* No.5, 9-28. 神田外語大学言語科学研究センター（CLS）.

久野暲（1973）『日本文法研究』東京：大修館書店.

久野暲（1978）『談話の文法』東京：大修館書店.

工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」森山・仁田・工藤（編）『日本語の文法３　モダリティ』161-234. 東京：岩波書店.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』東京：大修館書店.

中右実（1980）「文副詞の比較」国広哲弥（編）『日英語比較講座』第2巻. 159-219. 東京：大修館書店.

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』新日本語文法選書3. 東京：くろしお出版.

野田尚史（1984）「副詞の語順」日本語教育52. 79-90.

Ono, T. and R. Suzuki.（1992）Word order variability in Japanese conversation: Motivations and grammaticization. In *Text* 12（3）429-445. Walter de Gruyter.

Rizzi, L.（1997）The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman（ed.）, *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax.* 281-331. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Rizzi, L.（2004）Locality and Left Periphery. In A. Belletti（ed.）, *Structures and beyond: The*

cartography of syntactic structures. 223-252. Oxford: Oxford University Press.

Simon, M. E.（1989）*An Analysis of the Postposing Construction in Japanese.* Doctoral dissertation, University of Michigan.

高見健一（1995）「日英語の後置文と情報構造」高見健一（編）『日英語の右方移動構文』149-166. 東京：ひつじ書房.

高見健一（1998）「情報構造と伝達機能－省略、後置文、数量詞遊離」神尾昭雄・高見健一（著）『談話と情報構造』東京：研究社.

田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』Vol.6-5. 37-48.

Tanaka, H.（2001）Right-Dislocation as scrambling. *Journal of Linguistics* 37, 551-579.

綿貫啓子（2006）「日本語の後置文：左方移動文との相違」*Scientific Approaches to Language,* No.5, 251-268, 神田外語大学言語科学研究センター（CLS）.

綿貫啓子（2011a）『日本語後置文の機能と構造－対話の情報構造の観点から－』博士論文. 神田外語大学.

綿貫啓子（2011b）「非項要素の後置：機能と構造」『日本言語学会第143回大会予稿集』468-473.

綿貫啓子（2012）「後置文の情報構造と統語特徴」『日本言語学会第144回大会予稿集』258-263.